

# 社会史と教育運動

本研究所の研究プロジェクトとして、2016年度から「20世紀人文学の方法論的再検討」が始まった。私は、プロジェクト・リーダーとして第1回の研究会で、歴史学の分野から報告を行い、『文明』の前号に「20世紀人文学の方法論的再検討のための試論—歴史家黒羽清隆をてがかりとして—」として発表した。その内容は、副題にある通り、日本近現代史家で、また長く中学校社会科教師として教育運動に携わった、黒羽清隆（1934～1987）の仕事を手がかりとして、20世紀における歴史学研究の方法を検討したものである。主な論点は、①「現代歴史学」と表現する場合、「現代」の範囲が、1990年代の言語論的転回以後として理解されることが多いが、科学主義的実証主義的歴史学（人文学）への批判という文脈でみた場合、「現代」をもっと広い範囲で、20世紀以降における新たな研究の潮流として理解すべきではないか。1970年代の社会史研究もそうした文脈で理解すべきでないか。②日本の社会史研究に着目した場合、注目すべき歴史家として黒羽清隆がいる。黒羽の学問研究の方法は、1950年代の国民的歴史学運動の経験を基礎とするものであり、同時に柳田国男の民俗学の影響が著しい。黒羽の学問の方法論に着目した場合、1920・30年代の柳田の郷土史学・民俗学、1950年代の国民的歴史学運動、1970年代の社会史研究を「現代歴史学」の一つの系譜として理解できるのではないか、というものであった。「ないか。」という文言が続くように、またタイトルにもあるように、内容は初歩的な「試論」にとどまる。プロジェクトはその後、研究会を重ね、今号にも、神奈川大学教授安田常雄氏の公開研究会での講演内容や、本学課程資格教育センターの齊藤仁一朗氏の論文が掲載されている。

本稿では、私的な経験を交えつつ、社会史について考えているところを記したい。

前稿で考察の手がかりとした黒羽清隆にとっては、国民的歴史学運動を提唱した石母田正の『歴史と民族の発見』が、学生時代のバイブル的存在であったという。私が研究者の道を歩みはじめたのは1980年代であるが、私自身にとっては、黒羽の『十五年戦争史序説』（三省堂、1979年）が、バイブル的存在であった。その著作の「方法的な序説」において黒羽は、「民衆の社会史的な生態と意識との追求あるいは描写に、相対的なウエイトをかけ」、それにより「民衆闘争史の視座が欠けていること」を自身の「史論の弱点」としつつ、「しかし、あえて「五分の魂」の方からいえば、ここでの私は、民衆闘争史を論じないという、いわば「身銭」<sup>みぜに</sup>をきって、戦争の民衆「疎外」と民衆の戦争「疎外」という矛盾的構造にメスをいれようとしたのである。」（傍点は原文）と「見得」を切っている。しかしながら、「民衆闘争史」や「社会運動史」においても、「民衆の社会史的生態と意識との追求」が求められるのではないか、これが、研究者の卵であった私にとっての「問い」であった。そうした関心から、修士論文では、昭和恐慌期・満州事変期における労働組合の中堅層や下部組織の動向を研究対象とした。その際に参考にできたのは、日本を対象としたものでは、二村一夫の「全国坑夫組合の組織と活動」(1)～(3)（1970年～72年）くらいであった。そのため、ウェッブ夫妻の『労働組合運動の歴史』上下、とくに第8章の「労働組合の世界」や、ホブズボームの『イギリス労働史研究』などのイギリス労働運動史研究を参照することが多かった。ちなみにE・P・トムスの *Making of the English Working Class* はいまだ邦訳されておらず、*Past & Present* 誌掲載のモラル・エコノミーに関する論文 *The moral Economy of the English Crowd in the Eighteenth Century* を、おぼつかない語

学力で読んでいた程度であった。そしてウエップ夫妻やホブズボームの著作とともに読んでいたのが、R・H・トーニーの著作『急進主義の伝統』（浜林政夫・鈴木亮訳、新評論、1967年）であった。

R・H・トーニー（1880～1962）は、ウエップ夫妻も教師であったオックスフォード大学ペイリオル・カレッジを1903年に卒業した後、1906年にフェビアン協会に加わり、労働党に入党している。またアルバー・マンスブリッジが1903年に創設した労働者教育協会に1905年から参加し、1928年から45年まで17年間、会長をつとめている。『急進主義の伝統』の第2部「教育」は、労働者教育協会での活動に関わるものである。学者としては、『宗教と資本主義の興隆—歴史的研究—』（岩波文庫）など多数の研究を公刊したイギリス経済史研究の権威であり、「ジェントリ論争」のきっかけとなった「ジェントリの勃興」の著者としても知られる。

なぜ、ここでトーニーを持ち出したかという点、前稿冒頭で言及した長谷川貴彦『現代歴史学への展望 言語論的転回を超えて』（岩波書店、2016年）に、イギリスの労働史研究あるいは社会史研究が、成人教育運動の実践と密接に関わっていると看做し、つぎのような指摘があるからである。「二人〔レイモンド・ウィリアムズとE・P・トムソン〕に共通するのは、イギリスでは戦間期から盛んになる成人教育運動に携わった経験をもつことであり、そのことが労働者民衆の内在的な理解へと道を開いたのであった。」（p. 185）。長谷川がイギリスの成人教育運動としてあげているのは、オックスフォード大学のラスキン学寮（ラスキン・カレッジ）を中心としたヒストリー・ワークショップ運動であるが（p. 217）、マンスブリッジが創設した労働者教育協会の「チューター・クラス」が、成人教育運動の代表的な存在であった。

トーニーは1953年に、労働者教育協会の50周年記念講演で、「チューター・クラス」での経験について、つぎのように述べている。

大学の若いメンバーの実に多くの人びとが、かれらとは違った人生観をもち、かれらのテーマとは異なったテーマととりくむ成年の男女と親しく交わり、刺激をうけ教訓を学んだということは、歴史や経済学や政治学その他の社会生活にかんする研究の部門にとって有益であったと思う。わたくしは、わたくしが教えていたつもりでじっさいはわたくしの方が教えられていた成人の学生からうけた教訓に、いくら感謝しても足りないくらいだし、われわれの運動に加わった多くのチューターが同じことを言っているのを、わたくしは知っている。（『急進主義の伝統』、p. 128）

トーニーを含め、若き研究者は労働者との対話のなかで、「専門意識」に自縄自縛されたテーマ設定・分野設定の保守主義（吉沢南）から解放され、自らのテーマを見出していったのであろう。そして、このような創造的な関係は、国民的歴史学運動で高く評価された、黒羽ら東京教育大歴史学研究会と厚生省女子職員による「母の歴史」の作成においても、見出すことができるものと思われる。社会史研究は、教育運動・学習運動と密接なつながりをもつものであり、そして教育運動・学習運動のなかで、既存の学問の在り方そのものの問い直しが行われたのであろう。

トーニー自身、1949年に行った、「社会史と文学」という講演のなかで、社会史について、つぎのように語っている。

「社会史」—こういう言葉を用いるとすれば—の役割というのは、すでに活動している専門家の隊

列に新たに補充軍を編入することではない。それは主として、もし研究が分業を必要とするなら、その仕事の成果がいかに一時的なものであろうと、それを総合する必要が人文教育にはあるという真理を強調することにあり、そしてわれわれがこういう結果を個々バラバラの断片としてではなく、有機体のつながった部分としてみることによって、社会生活を構成する諸活動をもっと全体的・現実的にみられるように、われわれを力づけることにある、とわたくしは思う。(p. 263)

社会史は、一つの研究分野としてではなく、分業による研究の細分化に対して、それらを総合する営みとして、位置づけられている。ここに、19世紀的な科学主義的分析主義的人文学とは異なる、新たな人文学の潮流をみてとることができる。

R・H・トーニーを手がかりに、社会史研究と成人教育運動との関連を述べてきたわけであるが、教育運動を成人教育に限定する必要はなかろう。学校教育の現場もまた、既存の学問が問い直される場である。歴史教育に力を尽くし、『日本史教育の理論と方法』(地歴社、初版1972年、増補版1975年)という著書をもつ、黒羽清隆にたちかえって、拙ない文章を閉じたいと思う。

黒羽は、遺稿ともいべき「歴史教育から歴史学へ、そしてふたたび歴史教育へ」(1986年、『こどもとともに歴史を学び、歴史をつくる 黒羽清隆歴史教育論集』竹林館、2010年、所収)で、つぎのように記している(p. 64～65)。

私は、以下のつたなく、たどたどしい小論において、理性によってひえた聴覚のちからをできるかぎりいかして、「静かな、小さい声」に耳をかたむけつつ、私みずからの歴史教育論を構築してゆきたいとねがっている。

むろん、その「静かな、小さい声」とは、教室の一隅からの子どもたちによる啓示の光と音として、また、学習の対象領域としては、無告の民の営為やうったえやのろいや願望として、私の耳にきこえてくる。

「静かな、小さな声」は、言語化される以前の、まなざしや身振りを含むものであろう。黒羽の社会史は、そうした「静かな、小さな声」に、身体(聴覚)を傾けたことによるものであった。おそらく社会史は、学問それ自体の論理からというよりも、学びの現場における実践と、その反省のなかから立ち上がるものなのであろう。

東海大学文明研究所長  
東海大学文学部歴史学科教授  
山本和重